

〔連載〕『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

「第六回」世界の女性の首を飾った

御木本 幸吉

東京大学名誉教授 月尾嘉男

貴重であった天然真珠

古代エジプトのプトレマイオス王朝の女王クレオパトラはローマ帝国から派遣された將軍M・アントニウスを自身の美貌と盛大な宴会で骨抜きにする策略を実行しました。一例は自身が使用していた耳飾りの世界最大の真珠をワインヴィネガーで溶解して



御木本幸吉 (1858-1954)

乾杯したことです。この真珠一個で小国を購入できるほどの価値があり、策略は見事に成功、アントニウスは離婚してクレオパトラと結婚、ローマ帝国と対決して最後は自殺という結末になります。

同様の権力と美貌と真珠の逸話は中国にも存在します。唐代の六代皇帝の玄宗は自身の一人目の息子の夫人であった女性に魅了されて皇后にします。これが有名な楊貴妃です。皇帝六一歳、楊貴妃二七歳でした。皇帝は楊貴妃のために真珠風呂を用意し、真珠を粉末にして飲用させていたという伝説もあります。このような贅沢な行動のため、当然のように反乱が発生し、七五六年に楊貴妃は三八歳で縊死、玄宗は余生を監禁生活することになります。

昨年九月に挙行された大英帝国女王エリザベス二世の葬儀では、靈柩れいきうの上部に王位を

象徴する大英帝国王冠が設置されていました。王冠は一九〇五年にアフリカで発見された史上最大のダイヤモンド原石「カリナン」から加工された三二七カラットのダイヤモンドを中央に配置し、二八六八個のダイヤモンド、二七三個の真珠、一七個のサファイアなどを使用して一九三七年に製作された重量が一キログラムにもなる豪華な品物です(図1)。

真珠は二枚貝の内部に異物が侵入し、それを包含するようにカルシウムと有機物質が積層して形成される物質ですが、真珠の形状



図1 大英帝国王冠

の真珠は珍重され、大変に高価な宝石でした。しかし現在では、多数の女性が最初に購入するのが真珠の指輪や首飾りで、日本でもっとも多数の女性が所有している宝石になっていきます。かつては王侯貴族しか所有できなかった宝石を一般の庶民が購入できるように変革したのが今回紹介する御木本幸吉です。

養殖真珠へ挑戦開始

一九世紀まで世界の主要な真珠の産地は中東のペルシャ湾とオーストラリア大陸北側のアラフラ海でしたが、日本でも一七〇〇年代初期に発行された絵入り百科事典『和漢三才図会』には「真珠」という項目に「伊勢真珠」と「尾張真珠」が登場し、小粒の真珠は薬剤に利用し、大粒の真珠は高価で売買されると説明されています。その「伊勢真珠」

(明治二二)年に上京したとき、大日本水産会の幹事長職にあった柳栖悦ならよしに相談したところ、協力してもらえらることになり、地元の海底に煉瓦や小石を配置して稚貝が附着できるように準備をしました。これは成功しましたが、これでは偶然に真珠が誕生することを期待するだけでした。

そこで多数の真珠の生産方法を工夫する必要がありますと、再度、柳栖悦に相談したところ、東京帝国大学理科大学教授の箕作佳吉みつくりかきちを紹介され、一八九〇(明治二三)年に教授と大学院生の岸上謙吉に面会します(図2)。教示されたのは中国で一二世紀から実際に実施され、ヨーロッパでも多数の人々が行っている方法で、アコヤガイの内部に人工の異物を挿入することでした。方法は解明されましたが、課題は産業として成立する技術の確立でした。

の産地の中心は鳥羽地方で、海女が海中から採取するアコヤガイに真珠が発見されることがありました。

その鳥羽に「阿波幸」という屋号の有名なうどんの製造販売をする商店があり、そこに一八五八(安政五)年に長男として誕生したのが御木本幸吉(幼名は吉松)です。幸吉はうどんの製造販売では蓄財できないと判断し、野菜の販売などをしていましたが、二〇歳で家督を相続した一八七八(明治一一)年に東京と横浜に旅行したとき、小粒の真珠が薬剤として高額で中国商人に売却されていることを見聞し、これを商売の対象にしようと思心します。

早速、鳥羽で真珠採取の現場を調査してみると、真珠が高額の商品になるということでアコヤガイが乱獲されて水揚げが減少していることが判明しました。そこで一八八八



図2 箕作佳吉 (1858-1909)

半球真珠の発見

そこで幸吉は地元で実験を開始しますが、どのような素材が中核として適切かも不明のため、陶器や珊瑚や硝子の欠片かけらを用意して、地上に並べたアコヤガイが貝殻を開いた瞬間に挿入するという方法で開始しました。研究が進展してからは、外套膜がいとうまくという器官に異物が侵入すると刺激があるので、それを緩和するためにカルシウムを分泌して結

晶になるのが真珠だと判明していますが、そのような知識はなく手当たり次第に実験を実施していました。

まったく成果のないまま実験を継続していましたが、借金が増加し、周囲の人々も次第に近付かないようになり、応援してくれるのは一〇年前に結婚した夫人のうめだけという状態でした。そのような困窮状態に追討ちをかけるように、一八九二（明治二五）年に養殖していた英虞湾神明浦の海域に赤潮が発生し、幸吉が養殖していた五〇〇〇〇個近いアコヤガイが全滅し、これまで四年間の努力が水泡になってしまいました。

しかし幸運なことに、分散して養殖していた相島（図3）という場所では赤潮が発生しなかったため、翌年七月にうめとともに出掛けてアコヤガイを次々と開いたところ、半球ではあるものの五個の真珠を発見しました。

など地元の親戚の人々が手伝うようになりません。それについては、まだ真偽が明確ではない技術を応援するのは身内以外に存在しなかったという見解と、外部から大口出資があると成功したときの事業の独占に支障が発生することを憂慮して、幸吉が親戚以外の人々の雇用に前向きではなかったという見解があります。

一気に世界へ発展

幸吉の特許は半球真珠を対象にしたものですが、真球真珠の養殖生産は二人の人物が別々に発明しています。一人は幸吉の次女と結婚した西川藤吉で幸吉の設立した施設で研究し一九〇七（明治四〇）年に出願、もう一人は三重で研究していた見瀬辰平で同年の特許を出願し紛争になります。結局、特許

図3 相島



完全ではありませんが人工手段で真珠が誕生したということ、一八九六（明治二九）年一月に半球真珠の特許を取得しました。しかし、その幸福の三ヶ月後の四月に必死で応援してくれた愛妻うめが死亡してしまいました。三二歳でした。

養殖真珠は当時としては夢想のような途方もない発想でしたが、特許の取得に成功したことによって、幸吉の次弟夫妻、三弟夫妻

を共有することで決着し、外国では「見瀬・西川手法」と名付けられています。不幸なことに西川は特許が成立した翌年に病没してしまいました。

特許を取得できたため、幸吉は様々な事業を整理し、養殖真珠に専念することになります。一方、幸吉の成功が契機となって養殖真珠を目指す人々が登場し、幸吉は特許侵害で訴訟しますが、裁判では幸吉の方法は特許出願以前から書物などで周知の事実であったという判決になり、独占の時代が終了します。そこで幸吉は実績で勝負するため、一八九九（明治三二）年に東京に養殖の半球真珠と全球の天然真珠を販売する御木本真珠店を出店します（図4）。

この戦略が奏功し、一九〇二（明治三五）年に小松宮彰仁親王がイギリスのエドワード七世の即位の儀式に出席するときの土産



図4 御木本真珠店（1906）

として御木本真珠店で真珠を購入されたため、一気に有名になります。この真珠は途中でパリの装身具店で加工されて国王に献上されたため、幸吉は真珠のみではなく、加工することで付加価値が向上することに気がきます。そこで実弟の斎藤信吉のぶよしと義弟の久米武夫を海外に派遣して技術を習得させます。

これらの行動からも理解できるように、幸吉は技術開発に熱心であるだけでなく、商

一方、幸吉は養殖の技術開発にも注力し、大正時代中頃に真珠真珠の生産に成功し、世界に供給されるようになりますが、これが国際騒動の原因になります。当時はペルシャ湾産の天然真珠が主流で価格も安定していましたが、日本から天然真珠と見分けのつかない安価な養殖真珠が大量に市場に流入したため、価格が一気に下落しました。そこでイギリスとフランスの真珠商人が天然真珠と見分けのつかない養殖真珠を偽物として訴訟はじめます。

御木本側はオックスフォード大学のR・ジェームソン教授、ボルドー大学のH・L・ブータン教授など著名な学者を証人として対抗した結果、イギリスの組合とは短期で決着がつかしましたが、フランスの組合は天然真珠と養殖真珠には差異がないという判決を了承せず、ようやく一九二七年に決着し、以後、日本の

売の才覚が優秀で、海外に派遣した二人の情報を参考に一九〇七（明治四〇）年には築地に御木本金細工工場を開設して生産から加工・販売まで一貫する体制を整備するとともに、一九一三（大正二）年にロンドン支店を開設して以後、上海、ニューヨーク、パリ、ボンベイ、ロサンゼルス、シカゴ、サンフランシスコに次々と支店を開設していきます。

幸吉は宣伝にも天賦の才能がありました。一九二六年にフィラデルフィアで開催されたアメリカ独立一五〇周年記念博覧会には真珠と貝殻で製作した五重塔を出展、一九三九年にニューヨークで開催されたワシントン大統領就任一五〇周年記念博覧会にはアメリカの独立を象徴する「自由の鐘」を一万二二五〇個の真珠と三六六個のダイヤモンドで製作して会場に展示して「二〇〇万ドルの鐘」と賞賛されました。

養殖真珠が世界を席巻することになります。さらに一九二四（大正一三）年には多額納税者として、幸吉は貴族院議員にも就任します。養殖真珠の影響は天然真珠の世界有数の産地であったペルシャ湾岸の国々にも波及します。それらの国々の最大の輸出産品は天然真珠でしたが一気に需要が消滅することになり、真珠以外の産業資源への転換を模索した結果が石油でした。現在、人口三〇〇万人弱のカタールの一人あたり国内総生産が世界八位、人口五〇〇万人強のオマーンが四九位であるのは、幸吉が養殖真珠を発明し、世界に浸透させた効果ということもできます。

つぎお よしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋

大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て

東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実、人工知能

趣味はカヤックとクロスカントリースキー。

著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叢智』『転換日本』『清々しき人々』『凛々たる人生』など多数。